

利尻の医療

〇〇 5

はいつも通り午前九時から始まった。待合室は既に患者であふれている。外来患者は年々増え、一日平均百七十人。隣町の利尻富士町の武藤久美さん(三三)は風邪の長男、大一ちゃん(六)の手を引いて来院。「先生が優しい。設備も整っている。」

青年医師の情熱

島国保中央病院(利尻町)から未明、脊髄(せきすい)損傷の救急患者をへりで札幌大に送り出した十四日、診療



高度のテクニックの要求される胆道の内視鏡検査を行う西野院長(右)と大西内科医長

るし、頼りにしています」と話す。

病院を預かる西野徳之院長(三三)ら三人の医師はいずれも三十歳前後の若さ。この日は二、三時間しか睡眠を取れず、体力勝負の毎日が続く。そうして自治医大出身で、地域医療への思い入れは人一倍強い。

大西浩平内科医長(三三)は、マスクをかけて患者を診ている。「僕が風邪を引いても、休むわけにはいきません」と責任感をにじませる。

翌十五日の土曜日、病院は休みなのに、青木貴徳外科医長(三三)もが診察に追われていた。手にソイのトゲが刺さって化のうしたため切開した医師の傷口消毒、強風で壊れた

「毎日が当直」にじむ責任感

屋根を修理中に転落した患者の手当てで、「毎日が当直みたいなもの」と元気がいい。

外科医一人では、本格的な手術は難しい。青木医長は月に一度、市立稚内病院に向いて、自分の患者を手術する。「おなかの中を見ていると、その後のフォローが全然違います」。離島の病院にいても研さんを積み、ベストの治療を尽くす気迫をみなぎらせた。

西野院長は今年六月、旭川医大から赴任した。九二年までの二年間に続く二度目の勤務。「離島の病院に行くのは僕しかない」と述べてはな



土曜日も治療に追われる青木外科医長

々高まり、五割を超えた。医師の良心と誠意を込めた紹介状は年間千通に及ぶ。

四苦八苦の過疎地が多いなかで、利尻島にはこの十四年間、自治医大卒業の医師が派遣されている。町立病院を引き継いだ島国保中央病院は八五年、島の二町の共同運営に変わった。全島の患者の七

つた。留萌管内天塩町生まれ。幼いころ、母親が医者探しに苦労したのを見て、辺地医療を志した。一年ぶりの病院は、診療内

割を診療、昼夜を問わず駆けつける救急車の九割以上を引き受ける。島の中核病院としての役割が一段と高まっている。

こうした実績を背景に、七月、西野院長は両町主催の歓迎会で、具体的なデータに基づいて、医師一人の増員を熱く提案した。「現状の三人体制では、来院する患者を診るだけで精いっぱい。四人体制にすれば、こちらから島の各地区に飛び出して、病院に來れない患者を診察できる」。

以来、忙しい診療業務の傍ら町長に会って事情を説明したり、道地域医療課に救急患

◇自治医科大学へき地の医療確保のため七二年、全国の都道府県が共同で設立。道県別に一次試験があり、卒業後は義務年限の九年間、へき地医療に従事する。道内出身の入学者総数は五十九人で、卒業生は四十三人。大学所在地は栃木県南河内町。

者へのへり搬送の問題点を訴えるなど、活発に働きかけている。医師たちの問題提起を受けて、西町は近く病院運営をめぐる初のトップ会談を開き、医師増員の可能性や分べん施設拡充など、根本的な話し合いを行う。

西野院長は「自治医大の先輩が基礎を築いてくれたおかげで、島全体の医療向上に目を向けられるようになった。僕たちが発言し、行動しなければ、事態が前進する可能性はゼロです」。理想に燃える青年医師たちの情熱が、島を動かし始めている。(おわり)

この企画は、武藤理司記者が担当しました。

紹介状は年千通 全島の7割診療

容が格段に充実していた。内科医二人で内視鏡、超音波検査は年間各千件、大腸内視鏡は二百件のペース。消化器の病気が都会の専門病院に負けない高度の検査、治療を目指す。早期がんの発見比率も年

この連載企画に感想やご意見をお寄せください。〒住所、名前、年齢、職業、電話番号をお書きのうえ、ファクス011-210-5607か郵便で〒060-0911 札幌市中央区大通西三、北海道新聞生活部「利尻の医療」係へ。